

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 近親者との死別による心理的反応--予備的検討

著者	安藤 清志, 松井 豊, 福岡 欣治
著者別名	ANDO Kiyoshi, MATSUI Yutaka, FUKUOKA Yoshiharu
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	41
号	2
ページ	63-83
発行年	2004-02
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00003148/">http://id.nii.ac.jp/1060/00003148/</a>

## 近親者との死別による心理的反応 - 予備的検討<sup>(注1)</sup>

### Psychological Responses to Bereavement : A Preliminary Examination.

安藤 清志

Kiyoshi ANDO

松井 豊

Yutaka MATSUI

福岡 欣治

Yoshiharu FUKUOKA

「喪失 (loss)」に関連する現象は実に多様である。Harvey (1998) が編集した “ Perspectives on loss: A sourcebook. ” と題する本の章を眺めてみても、死別、離別、身体機能の喪失 (脳損傷など) 慢性疾患、スポーツ選手の引退、ホームレス、失職・退職など、さまざまな種類の喪失が扱われている。Harveyらは、これら「喪失」に関わる諸現象が個別に研究対象とされてきた点を問題にして、より大きな理論的文脈に基礎を置くことの重要性を指摘している (Harvey & Miller, 1998)。Miller & Omarzu (1998) は、このような喪失を「それに関与する個人によって否定的に知覚された出来事であり、その人の社会的状況、関係、認知に長期的な変化を及ぼすもの」と定義している。この定義は、喪失を単にそれを経験する個人のみならず、より広範囲かつ長期的な影響を及ぼす事象として捉えている点に特徴がある。その意味で、喪失研究において「社会」心理学が果たす役割が重要であることを示唆しているといえよう (Harvey, 1998)。

さまざまな喪失の中でも、近親者の死はとくに大きな影響を及ぼす。実際、よく知られているように、Holmes & Rahe (1967) の社会的再適応評価尺度 (Social Readjustment Rating Scale) による研究では、さまざまな出来事の中で「配偶者の死」が最もストレスの「総量」が大きいことを示している。また、Stroebeらは、特に男性の場合、配偶者との死別を経験した人のほうが、死別を経験していない人に比べて、その後の死亡率が高いことを繰り返し指摘している (Stroebe & Schut, 2001; Stroebe & Stroebe, 1983)。

死別に関する研究は欧米で数多く行われており、既に研究を集大成したハンドブックを出版されているが (Stroebe, Hansson, Stroebe, & Schut, 2001; Stroebe, Stroebe, & Hansson, 1993) 日本において

も遺族を対象とした実証的研究が蓄積されつつある。たとえば、河合による高齢者の死別反応の研究(河合,1987ほか)、交通遺児家族の問題を掘り下げてきた副田ら(交通遺児育英会、1981ほか)および藤田ら(藤田,2003;藤田・柳田,2000)の研究、ホスピスの遺族たちの意識を分析した坂口らの研究(坂口ら、1999ほか)、大学生の対象喪失研究(池内ら、2001)、犯罪被害者の遺族研究(大和田,2003)などを挙げることができる。

さて、死別体験の中でも、それが事故や犯罪などによる「暴力的な死」である場合には遺族の心理面・身体面への影響が大きく、「病理性悲嘆(pathological grief)」、「複雑性悲嘆(complicated grief)」、「外傷性悲嘆(traumatic grief)」(Jacobs, Mazure, & Prigerson, 2000)などの名称の下にこうした心理的状況を導く要因について検討が加えられてきた(Figley, Bride, & Mazza, 1997; Jacobs, 1999; Rando, 1993)。

航空機事故も、こうした悲嘆を導く可能性がある死別経験といえる(Butcher & Dunn, 1989)。われわれは、これまで航空機事故で近親者を失った人々に対する質問紙調査・面接調査を実施し、事故による死別の長期にわたる心理的影響について分析してきたが(安藤,2001, Ando et al., 1999; 安藤他,1999,2001; 福岡他,1999a,1999b,2001; 松井他,1999)、航空機事故には、死の突然性、故人の遺体の損傷の激しさ、多人数の死、意味探求の困難性、長期にわたる裁判など、前述のような悲嘆を生じさせる可能性がある条件が数多く含まれていることが指摘された。これらの研究では、他の多くの研究と同様にGHQ(一般健康調査票)やIES(Impact of Event Scale)などの尺度を用いて、遺族の心理的状況の側面を数量的に捉えることを試みた。しかし、特定の事象を経験した人々を対象にした研究では統制群の設定が困難な場合も多く、得られた結果の解釈が必ずしも明確にならないという問題がある。多くの人々を対象とした同一の研究の中で死別の「様相」を包括的に描き出し、個々の遺族集団の研究結果と比較検討する必要があると思われる。また、死別の影響を客観的に捉えるための信頼性・妥当性の高い尺度の開発が重要であることは当然であるが、同時に、個々の死別経験者の尺度得点の意味を評価するためには、無作為抽出による調査を実施して標準的なデータを得ることが必要であろう。今回の報告は、このような目的のために実施予定の本調査に先立って実施された予備調査の結果である。

本稿では、死別経験が遺族に及ぼす影響をGHQやIESなどの尺度を用いて分析した結果に加えて、以下の2点について行われた分析の内容を報告する。なお、本調査で得られたデータのうち、ソーシャルサポートに関わる部分に関しては福岡・安藤・松井(印刷中)で報告する。

- (1) 直後悲嘆の規定因 遺族の悲嘆からの回復過程に影響する要因は、遺族自身の要因、故人および故人と遺族との関係、死の状況、死や災害のとらえ方、死別後の家庭状況などに分けることができる(松井ら、1995)。今回の分析では、これらの中から遺族自身の要因および死の状況を取り上げ、死別直後の悲嘆と死の状況との関連を分析する。分析の対象とする要因は、遺族(回答者)の性別、故人との続柄、故人が生計を担っていたか、死別の原因、死別時の遺族(回答者)の年齢、遺体との対面の有無、死別の突然性である。先行研究(松井ら、1991など)の結果が

ら、女性の方が男性より、配偶者や子どもを亡くされた人の方が他の続柄より、事故による死別の方が他の原因による死別より、死別年齢が若い人の方が、遺体と対面した人の方が、死別が突然であった方が、それぞれ直後の悲嘆が強いことが予想される。

- (2) 死別後の心理的变化 外傷的な体験をした人は、それに伴う悲嘆や苦痛とは別に、時にその経験から「得るもの」があったと報告する。決して望むことはない出来事からこのような有益な事柄を得ることを、Janoff-Bulman & Berger (2000) は「根本的なアンビバレンス」と呼んでいる。近年、死別など「喪失」後の心理過程を研究する場合、悲嘆や罪悪感などの否定的側面に加えて、このような肯定的変化が回復に及ぼす影響の重要性が指摘されている。トラウマ後の成長の様相を明らかにするために、Tedeschi & Calhoun (1995) の“ Post-Traumatic Growth Inventory (PTGI) ”、Joseph et al. (1993) の“ Changes in Outlook Questionnaire ”、Park, Cohen, & Murch (1996) の“ Stress-Related Growth Scale (SRGS) ”、McMillen & Fisher (1998) の“ Perceived Benefit Scale ” など、さまざまな尺度が開発されている。本邦でも、東村・坂口・柏木 (2001)、東村・坂口・柏木・恒藤 (2001) によって尺度構成が試みられている。これらの尺度で扱われている「成長」の側面は比較的共通しており、「自己の強さ(自信やスキル)」、「死への態度の変化」、「人間関係の重要性の認識」、「生に対する感謝の念」、「ライフスタイルの変化」、「希望(新しい事への関心)」などが項目化されている。なお、肯定的側面だけでなく否定的変化も同時にとらえようとする尺度もある(e.g., Joseph et al., 1993)。本研究では、これらの尺度を参考にしながら、死別後の心理的变化を捉えるための項目群(肯定的変化と否定的変化)を用意して回答を求めた。今回は、これらの項目の因子構造および各因子と性別、年齢との関係について予備的な分析を行う。

## 方 法

調査対象者・手続き 関東地区および関西地区の5つの大学の学生とその家族。学生に対しては、講義中に研究目的を説明した後、集合調査形式で実施した。またこれらの学生の親に対して学生を通じて協力を依頼し、承諾が得られた学生に対して、返送用封筒と質問紙を自宅に持ち帰るかあるいは郵送するか選択してもらった。いずれの場合も、回収については郵送とした。実施時期は2001年12月から2002年1月であった。

以上の手続きの結果、有効回収数は計1253名となった。年齢層別の割合は、18-19歳が23.8%、20-24歳が33.6%、25-29歳が0.7%、30-34歳が0.5%、35-39歳が0.6%、40-44歳が4.2%、45-49歳が14.7%、50-54歳が16.9%、55-59歳が3.0%、60-64歳が0.7%、65-69歳が0.7%、70-82歳が0.6%であった。

質問項目 調査用紙に含まれていた質問項目は以下の通りである。(注2)

- (1) 回答者の属性 性別、年齢、学歴

- (2) 精神的健康度 一般健康調査票 (General Health Questionnaire: GHQ) 12項目版。4件法による評定値に0.0-1.1点を与えるGHQ方式により合計点を算出した。得点が低いほど精神的に健康であることを示す。
- (3) 近親死の経験の有無 質問「あなたは、これまでの人生の中で、自分にとって身近な人(家族や親戚、友人、先生、職場の同僚など)の死を経験したことがありますか?」に対して「まったくない」または「ある」で回答を求めた。
- (4) 死別経験の選択 「ある」と回答した人に対して、これまでの死別経験の中で最も強い影響を与えたと思うものを、子ども、夫・妻、実母・実父、義父・義母、兄弟・姉妹、祖父・祖母、他の親戚、友人、恋人、職場の同僚、その他、の中から選択してもらった。以降の質問は、すべて、ここで選択された死別経験に関するものである。
- (5) 故人の属性等 故人の性別・年齢、死亡した時期、死別時の回答者の年齢。
- (6) 故人と家族の経済上の関係 「家族の生計をになっていた」「生計の主ではないが、収入を入れていた」「世帯の生計とは関係がなかった」のうちから1つを選択させた。
- (7) 死別に伴う仕事 経済面で変化 「新たに働くようになった」「仕事をやめた」「転職した」「亡くなった人の仕事を継いだ」「家族がアルバイトを始めた」「世帯の収入が減った」「家計が苦しくなった」「経済的な問題で家族が進路変更をした」「家族が奨学金や育英基金などの助成を受けた」「その他」から複数選択の回答を求めた。
- (8) 死亡原因 「病気」、「交通事故」、「交通事故以外の事故」、「自然災害」、「その他」のうちから1つを選択させた。
- (9) 他の人の過失・犯罪の有無 「他の人の過失があった」「他の人の犯罪の被害にあった」「他の人の過失や犯罪はなかった」「その他」のうちから1つを選択してもらった。
- (10) 遺体との対面の有無 対面に関しては、「対面した」「対面していない」「覚えていない」のうちから1つを選択してもらった。さらに、「対面した」を選んだ回答者については、遺体の様子について、「生前と変わらなかった」「やや変わっていた」「生前とは全く異なっていた・損傷がひどかった」から1つを選択してもらった。
- (11) 死の突然性 「まったく予期しない突然の死だった」「ある程度、看取りあるいは心の準備をする期間があった」のうちから1つと選択してもらった。さらに、後者を選択した回答者に対しては、看取りの期間を尋ねた。
- (12) 死別後の気持 「その人が亡くなったことが悔やまれた」「その人が亡くなって、つらい気持ちになった」「その人が亡くなったのは自分のせいかもしれないと思った」「その人が亡くなったことで、他人を責めたい気持ちになった」について、「あてはまらない(1)～おおいにあてはまる(4)の4段階評定を求めた。
- (13) 故人との関係 「私にとってかけがえのない存在だった」「接していて気疲れすることがあった」「気持ちのうえでとても頼りにしていた」「意見が合わず、対立することがあった」「私のこ

とを、いつも気にかけてくれた」「その人の気持ちを十分に理解して（わかって）あげられなかった」「その人が、私の生きが이었다」について、4段階評定を求めた（「そうは思わない（1）」～そのとおりだと思う（4））。

(14) 死別後および現在のソーシャルサポート 「死別を体験したあとしばらくの間」および「現在」に期間を限定し、「家族や親戚」、および、「友人や近隣、職場の人など、家族や親戚以外の人たち」についてサポートの程度を尋ねた。使用された項目は、福岡・矢富・竹内・西堀・大山・鈴木（2001）を参考に、各10項目（情緒的、手段的各5項目）を設けた。回答方法は、死別後については「1.いなかった」「2.一応いた」「3.確かにいた」、現在は「1.いない」「2.一応いる」「3.確かにいる」の各3段階とした。

(15) 出来事インパクト尺度（IES：Impact of Event Scale） Horowitz et al.（1979）が作成した尺度で、「侵入（8項目）」「回避（7項目）」から成る。最近の一週間に期間を限定し、質問項目の「その出来事」のところに「その人との死別」をあてはめて回答するように求めた。原版と同じ4点尺度上に求めたが、原版とは異なり、各評定に対して1（「まったくなかった」）～4（「よくあった」）の数値をあてた。

(16) 死別後の心理的变化 死別を体験することによって生じる可能性のある40の側面の変化について、「あてはまらない（1）」～「おおいにあてはまる（4）」の4段階評定を求めたものである。項目は、前述の諸尺度などを参考にしながら、肯定的な内容と否定的な内容がほぼ対応するよう新たに作成した。具体的には「人間関係の大切さを実感するようになった」、「自分に自信がもてるようになった」、「自分が周囲によって生かされている存在だと思うようになった」など肯定的変化を表わす20項目と、「世の中は理不尽だと感じるようになった」、「我慢強さや辛抱強さがなくなった」、「人の死について考えるのを避けるようになった」、「他人への感謝の気持ちがもてなくなった」など否定的変化を表わす20項目が含まれた。

(17) 信仰・宗教活動 「宗教団体で活動している」「活動はしていないが、特定の宗教を信じている」「特定の宗教ではないが、信仰心はもっている」「あまり信仰心はもっていない」から1つを選択してもらった。

## 結 果

死別経験の有無 回答者1253名のうち、「あなたはこれまでに、自分にとって身近な人（家族や親戚、友人、先生、職場の同僚など）の死を経験したことがありますか？」という質問に対して「ある」と回答した人は1042名であった。今回の調査は、自ら回答者となった大学生に対し、家族メンバーの中で回答者となってくれる可能性のある人に調査用紙を渡して回答を依頼するように求めた。その結果、大学生以外の回答者はその親世代が中心となった。そこで、前述の1042名のうち、18～24歳層

と40～59歳層の回答者に限定して分析を行うことにした。これらの年代層の回答者のうち、身近な人の死を経験したことがある人の割合を表1に示す。18～24歳層では76%、40～59歳層では93%の回答者が身近な人の死を経験したことがあると回答していた。以後の分析は、これらの死別経験ありと回答した人を対象とすることにした。具体的には、18～24歳層544名(男性220名、女性324名;以後、「若年層」とする)と40～59歳層452名(男性188名、女性264名;以後、「中年層」とする)、合計996名である。

**年代層別の比較** 若年層と中年層の回答を比較したところ、両層とも女性が6割弱(若年層60%、中年層58%)を占め、年代差は見られなかった。死別時の年齢は、若年層では「中学卒業以上未成年」(43%)が多く、中年層では「40-49歳」(36%)が多かった。遺体との対面した比率は、若年層(77%)より中年層(90%)が高かった。死別の突然性は、「まったく予期しない突然の死だった」が両層とも4割台で(若年層49%、中年層44%)、年代差は見られなかった。

**故人との続柄** 最も強い影響を受けた死別経験について、故人との続柄を見ると、若年層では「祖父・祖母」(58%)が多く「友人」(15%)「他の親戚」(13%)が続いた。中年層では「実父・実母」(50%)が多く、「祖父・祖母」(13%)や「義父・義母」(12%)が続いていた(表2参照)。なお、表3は、死別から10年以内の回答者に限定して、故人の続柄別にまとめたものである。以後のいくつかの分析では死別から10年以内の回答者に対して分析を行ったが、その場合には結果の記述に際して言及する。

**死亡原因** 学生群では、病気72.6%、交通事故9.1%、交通事故以外の事故2.8%、自然災害0.9%、その他14.6%であった。中年層では、病気82.5%、交通事故4.9%、交通事故以外の事故3.1%、自然災害0.7%、その他8.8%であった。

**世帯の生計との関係** 若年層の場合、「世帯の生計とは関係がなかった」がほとんどを占め(82.7%)であったが、中年層の場合には、「世帯の生計とは関係がなかった」人は65.6%であり、「家族の生計を担っていた」とした回答者も23.1%いた。

**死別の衝撃度、精神的健康との関連** 死別から10年以内の回答者に対して、死別の衝撃の程度が回答者の性別、経過年数、続柄とどのような関係にあるのかを、IES得点とGHQ得点を用いて分析した(図1、図2、図3、図4)。両群で、死別者の続柄毎の度数が大きく異なるため、若年層に関しては、「実父・実母」「祖父・祖母」「他の親戚」「友人」を選んだ回答者、中年層に関しては「実父・実母」「義父・義母」「他の親戚」「友人」を選んだ回答者に限定して、回答者の性別×続柄×経過年数の分散分析を、GHQ得点およびIES得点に対して実施した。その結果、中年層では、GHQ得点に関してはいずれの主効果、交互作用も有意でなかった。IES得点に関しては、性別の主効果が有意であり、女性( $M=28.1$ )のほうが男性( $M=22.1$ )よりも高かった( $F=5.89, p<.02$ )。死別対象者の主効果も有意な傾向が認められ( $F=2.17, p<.10$ )、死別対象者が友人の場合( $M=33.63$ )、実母・実父( $M=23.93$ )、義母・義父( $M=24.10$ )、他の親戚( $M=23.62$ )よりも高かった( $p<.06$ , Student-Newman-Keuls検定)。

若年層では、IES得点については、死別対象者の主効果が有意だった。死別対象者別のIES得点の平均値は、「実父・実母」( $M=24.68$ )「祖父・祖母」( $M=21.24$ )「他の親戚」( $M=25.49$ )「友人」( $M=25.68$ )だったが、これらのうち、友人の場合のIES得点が「祖父・祖母」の得点よりも高い傾向があった( $p<.08$ , Student-Newman-Keuls検定)。

**死亡原因と衝撃度** 死別から10年以内の回答者に対して、死亡原因によって死別の衝撃がどのように異なるかを、IES得点によって分析した(表4)。ただし、これまでの研究経緯と各群の人数の関係から、「病気」(若年層310名、中年層159名)と「交通事故」(若年層41名、中年層12名)の比較に限った。若年層では、交通事故のほうが( $M=26.5$ ) 病気( $M=22.86$ )よりもIES得点が有意に高かった( $t=2.55$ ,  $p<.02$ )。中年層では、交通事故死と病死の間に有意な差はなかった( $M's=25.54$ ,  $25.42$ )。なお、若年層において、「病気」に関してその死が突然であったかどうかでグループ分けしたところ(事故死の場合は、41人中39名が「突然」と回答) IES得点は「突然の病死」群では23.57、「突然でない病死」群では22.48でほとんど差がなかった。

**故人との関係性** 死別から10年以内の回答者に対して、7項目を因子分析した結果、「私にとってかけがえのない存在だった」など肯定的内容の4項目と、「意見が合わず、対立することがあった」など否定的内容の3項目に分かれたため、それぞれの評定値を合計し、肯定的関係性得点、否定的関係性得点とした。いずれの群においても、肯定的関係性得点はIESの侵入得点および合計得点と有意な正の相関があった。一方、否定的関係性得点は、中年層においてのみ、IESの侵入、回避、合計得点と有意な正の相関があった(表5)。

**直後悲嘆の規定因** 直後悲嘆に関する分析では、死別後の経過年数を10年に限定せず、当該年齢層で死別経験ありと回答した人すべてを分析対象とした。

直後の悲嘆に関しては死別時に「その人が亡くなったことが悔やまれた」と「その人が亡くなってつらい気持ちになった」の2項目(「あてはまらない」から「おおいにあてはまる」までの4件法)を用いた。これら2項目の相関は $r=.754$  ( $N=1,038$ )であった。2項目への回答を加算し、直後の悲嘆得点とした。性と世代別に得点を算出し、2要因の分散分析を行った(表6)。その結果、性( $F(1,987)=6.430$ ,  $p<.01$ ) 年代( $F(1,987)=4.091$ ,  $p<.05$ )いずれの主効果も有意であり、男性より女性の方が、また、若年層より中年層のほうが、直後の悲嘆が強かった。交互作用は有意でなかった( $F(1,987)=0.021$ , ns)。

さらに、直後悲嘆得点を基準変数、以下の変数を説明変数として数量化 類を実施した。回答者の性別、故人との続柄、死別時に故人が生計を担っていたか(生計と関係がないか否かの2値にカテゴリー化)、死別の原因(「病気」とそれ以外にカテゴリー化)、死別時の回答者の年齢、遺体との対面の有無(2件法)、死別の突然性(2件法)。

直後悲嘆の得点を基準変数とし、上記の諸変数を説明変数とする数量化 類を実施した。解析は年代層別に行い、両層で回答分布が大きく異なっていた説明変数(続柄、死別時の年齢)は、カテゴリー-区切りを変えて投入した。カテゴリーと解析結果を、表7、表8に示す。



死別後の心理的变化 直後悲嘆の分析と同様、以下の分析も死別経験ありと回答したすべての回答者を対象とした。死別後の変化に関する40項目を、肯定的項目と否定的項目に分けて因子分析(主因子解/バリマックス回転)を行った結果、前者については2因子、後者については3因子が得られた。次に、それぞれの項目の因子負荷量の大きさや他因子への負荷の程度を考慮して、それぞれ8項目ずつを削除し、残りの肯定的12項目、否定的12項目を、それぞれ再度因子分析した(表9、表10)、肯定的項目の2因子は「自信・成長」、「生への実感と感謝」、否定的項目の3因子は「自己信頼感喪失」、「死への恐れ」、「他者・世界への不信」を表すものと解釈した。

次に、各因子の項目の評定値の合計を個人ごとに算出し、2(性別)×2(年齢層)の分散分析を行った。結果を表11に示す。「自信と成長」については中年層( $M=10.94$ )のほうが若年層( $M=9.17$ )よりも有意に高く、「生への実感と感謝」に関しては、女性( $M=15.16$ )のほうが男性( $M=13.76$ )よりも、また若年層( $M=14.87$ )のほうが中年層( $M=14.24$ )よりも有意に高かった。否定的項目のうち、「自己信頼感の喪失」については女性( $M=7.15$ )のほうが男性( $M=6.84$ )よりも有意に高かった。また、「死への恐れ」は、女性( $M=5.25$ )のほうが男性( $M=4.65$ )よりも、また若年層( $M=4.06$ )よりも中年層( $M=5.79$ )のほうが有意に高かった。

## 考 察

今回の調査では、18~24歳層では8割弱、40~59歳層では約9割の回答者が身近な人の死を経験しており、いずれの年齢層においても、死別が非常に一般的な経験であることがわかる。ただし、当然のことながら死別対象者を含めその様相はかなり異なっていた。若年層では、約6割の回答者が祖父・祖母との死別をあげたのに対して、中年層の場合には、実母・実父および義父母が6割以上を占めていた。この構成比の違いは、以下の若年層と中年層の比較に際しては常に注意しておかなければならない点である。

平成13年人口動態統計によると、日本人の年間死亡者数に占める各種の死亡原因の割合は、病気・老衰92.0%、交通事故1.3%、不慮の事故2.8%、自殺3.0%である。これと比較すると、今回は全般に事故(交通事故とその他の事故)の割合が高かった。これは、複数の死別を経験している場合、事故による死別のほうが衝撃が大きいため、これが選択される可能性が高かったのかもしれない。実際、本研究では、とくに若年層の場合、交通事故と病死を比べると前者のほうがIES得点が高い傾向が示されている。これは、交通事故の遺族(主として配偶者や親)が長期にわたる悲嘆反応を持続させることが示されている欧米の諸研究と一致している(Cleiren, Grad, Zavasnik, & Diekstra, 1996; Lehman, Wortman, & Williams, 1987; Winje, 1996; Winje & Ulvik, 1995)。また、今回の結果では、交通事故による死別群のIES得点のほうが「突然の病死」群よりも高く、悲嘆を高める要因とされる「死の突然性」よりも、交通事故による死別という「死のモード」そのものの影響であることが示唆される。

死別という出来事の衝撃度を検討した結果、中年層では男性よりも女性のほうがIES得点が高かったが、これは後述の直後悲嘆における性差とも一致している。経過年数は、IES得点およびGHQ得点いずれにも影響を及ぼさなかったが、一年毎という単位では、「直後」からの変化を捉えられない可能性も考えられる。

個人との関係性と死別の影響の関係をしてみると(表5) 若年層では肯定的関係性項目とIES得点の間に有意な相関があるのに対して、中年層では肯定的項目だけではなく、否定的項目もIES得点との有意な相関が認められた。前述のように、若年層の死別対象は主として祖父母であるのに対して、中年層では約65%が実父母または義父母である。したがって、中年層は若年層に比べて関係の期間が長く、故人との対立や葛藤を含む記憶も多いことが予想される。このことが、否定的項目とIES得点の有意な相関として現れていると考えられよう。

次に、直後悲嘆の規定因について考察する。若年層では、続柄、生計を担っていたか否か、性別の要因が、直後悲嘆を規定していた。続柄別にみると、「実父母・義父母」や「友人・恋人」と死別した場合に直後悲嘆が強く、個人が生計を担っていた場合にも強くなっていた。男性に比べ、女性の方が直後悲嘆が強かった。中年層では、続柄、死の突然性、遺体との対面、性別、死別時の年齢の要因が直後悲嘆を規定していた。「子・配偶者」や「友人・恋人」との死別や、死別が突然で、遺体と対面した場合に、悲嘆が強かった。若年層と同様に、男性に比べて女性の直後悲嘆の方が強く、年齢が若いときに死別した場合ほど、直後悲嘆が強かった。

両層とも、故人の「続柄」がもっとも影響が強く、回答者の「性別」も影響していた。続柄別にみると、「親」や「子供」、「配偶者」という血縁性の高い対象だけでなく、「友人・恋人」という親密性の高い対象との死別において、直後悲嘆が高いことが明らかになった。子どもとの死別が大きな悲しみをもたらすことは多くの研究で明らかにされているが(Sanders, 1998など)、日本においても同様の傾向が見られた。日本においても配偶者の死が強い衝撃を与えるという河合(1987)の知見とも整合している。血縁性が高い家族の死別が悲嘆をもたらすという知見は、進化心理学の文脈においても理解されよう(Archer, 1999, 2001)。

一方、親密性が直後悲嘆を規定するという本研究の示唆に関しては、愛着対象の喪失が悲嘆をもたらすと主張する精神分析の文脈(Freud, 1916など)と合致する。しかし、従来の研究では故人との両価的感情(Bonanno, Notarius, Gunzerath, Keltner, & Horowitz, 1998; Weiss, 1988など)に焦点が当てられており、親密性や愛情の深さと悲嘆との関係については、今後の検証が必要と考えられる。

男性に比べて、女性の方が直後悲嘆が強いという本研究の知見は、欧米の多くの研究知見とも整合している(Sanders, 1998など)。ただし、直後悲嘆は女性が強いが、回復が早く、男性は悲嘆の回復が遅いという指摘もあり、死別後に時間が経過した場合の悲嘆の性差に関しては、今後の研究課題として残されている。

若年層に特有な要因としては、故人が「生計をになっていたか」という要因の影響が見いだされた。交通事故などで親を亡くした青年たちが、経済的問題に苦しめられるという財団法人交通遺児育英会

の一連の調査報告(1994など)と照合すれば、生計を担っていた保護者を亡くした青少年が、経済的な問題と絡んで、直後悲嘆を強めていた可能性を推定することができよう。一方、中年層に特有な要因としては、遺体との対面・突然性・年齢も影響していた。遺体との対面が直後悲嘆を高めるという本研究の結果は、スウェーデンのホテル火災の遺族への面接を行ったLundin(1987)などの研究見解とは異なる結果となっている。遺体との対面は、直後の悲嘆を高めるが、死別の事実への否認を妨げるために、長期的な悲嘆は和らげる効果をもつものと推定される。突然の死別が強い直後悲嘆を生むという結果は、Parkes & Weiss(1983)らの面接結果と一致している。若いときに体験した死別の方が直後悲嘆が強いという結果も、Parkes & Weiss(1983)やSanders(1988)と一致していた。

死別後の変化に関する40項目を、肯定的項目と否定的項目に分けて因子分析した結果、それぞれ、2因子、3因子が得られた。肯定的項目に関しては、従来の研究のように「生きることの価値」に関する側面と「人間関係の重要性の認識」に関わる項目が分離されず、自己にせよ他者にせよ「存在するそのものに対する感謝の気持ち」を表わす項目が一つの因子となった。今後、死別からの経過年数等を考慮してさらに分析を加える予定である。女性が男性よりも「自己信頼喪失」「死への恐れ」の得点が高いという結果は、女性のほうが死別直後の悲嘆が強いという前述の結果と一致するものであるが、その一方で、「生への実感と感謝」という肯定的変化については男性よりも得点が高かった。この点、ソーシャル・サポートの性差も加味した分析が必要となる。「自信と成長」は中年層で高く、「生への実感と感謝」は若年層で高いという結果が得られたが、これは、「自信と成長」は死別への対処の長期にわたる蓄積が必要であること、若年層の場合は初めての死別経験に対する評価の可能性が強いことから理解されるかもしれない。

今回の調査は、質問紙の配布手続きの関係から若年層と中年層に限定されることになったが、この結果を参考にしてさらに質問項目の選定・修正を行い、無作為抽出による本調査の準備を進めていく予定である。

#### 【注】

- (1) 本研究の実施にあたり、平成13年度～平成15年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(B)13410041)「航空機事故遺族の死別後の心理的反応と回復過程に関する研究」(研究代表者:安藤清志)の助成を受けた。なお、本稿は日本社会心理学会第43回大会(2002年,一橋大学)における発表内容(安藤・松井・福岡,2002;松井・安藤・福岡,2002)を加筆・再校正したものである。  
死別に関する質問への回答は、それ自体がかなり辛い経験となり得る。本調査に協力くださった回答者の方々に深く感謝の意を表したい。
- (2) これらの質問項目のうち、(9)他の人の過失・犯罪の有無、(14)死別後および現在のソーシャルサポート、および(17)信仰・宗教活動、については今回の報告に含めていない。

#### 【引用文献】

- 安藤清志 2001 航空機事故の遺族が直面する喪失 PSIKO(冬樹社),21,30-35.  
Ando, K., Matsui, Y., & Fukuoka, Y. 1999 Bereavement in an airline disaster: A preliminary report. Paper

- presented at the 3rd conference of the Asian Association of Social Psychology, Taipei, August 1999.
- 安藤清志・福岡欣治・松井豊 2001 航空機事故による死別反応の研究(5) - 台湾遺族調査の概要 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 556-557.
- 安藤清志・福岡欣治・松井豊 2002 近親者との死別による心理的反応(2) - 死別によって得るもの、失うもの 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 530-531.
- 安藤清志・松井豊・福岡欣治 1999 航空機事故による死別反応の研究(3) - 調査の概要 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, 260-261.
- Archer, J. 1999 *The nature of grief: The evolution and psychological reactions to loss*. Routledge.
- Archer, J. 2001 Grief from an evolutionary perspective. In M.S. Stroebe, R.O.Hansson, W.Stroebe, & H.Schut (Eds.), *Handbook of bereavement: Consequences, coping, and care*. American Psychological Association.
- Bonanno, G.A., Notarius, C.I., Gunzerath, L., Keltner, D., Horowitz, M.J. 1998 Interpersonal ambivalence, perceived relationship adjustment, and conjugal loss. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 66, 1012-1022.
- Butcher, J.N., & Dunn, L.A. 1989 Human responses and treatment needs in airline disasters. In R. Gist & B.Lubin (Eds.) *Psychosocial aspects of disaster*. Wiley. Pp.86-119.
- Cleiren, M.P.H.D., Grad, O., Zavasnik, A., Diekstra, R.F.W. 1996 Psychosocial impact of bereavement after suicide and fatal traffic accident: A comparative two-country study. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 94, 37-44.
- Figley, C.R., Bride, B.E., & Mazza, N. 1997 *Death and trauma: The traumatology of grieving*. Taylor and Francis.
- Frued, S. 1916 Trauer und Melancholie. 加藤正明(訳) フロイト選集改訂版10不安の問題 日本教文社, 124-146.
- 藤田悟郎・藤田多美 2000 交通事故遺族の心的反応 日本心理学会第64回大会発表論文集, 232.
- 藤田悟郎 2003 交通事故の精神的後遺症 ト라우マティック・ストレス 1(1), 39-45.
- 福岡欣治・安藤清志・松井豊 2003 死別体験後のソーシャル・サポートと心理的適応に関する予備的検討 静岡文化芸術大学研究紀要, 4, 55 - 60.
- 福岡欣治・松井豊・安藤清志 1999a 航空機事故による死別反応の研究(4) - 故人との心理的関係性と遺族の健康状態 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, 262-263.
- 福岡欣治・松井豊・安藤清志 1999b I E S (Impact of Event Scale) による死別反応測定の試み: 航空機事故による死別反応の研究(2) 感情心理学研究, 7(1), 42.
- 福岡欣治・松井豊・安藤清志 2001 航空機事故による死別反応の研究(6) - 故人との心理的関係性と遺族の健康状態: 台湾遺族の場合 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 558-559.
- 福岡欣治・矢富直美・竹内志保美・西堀好恵・大山直美・鈴木みずえ 2001 早期痴呆高齢者の家族におけるソーシャル・サポート 患者への援助的行動、患者の心理的適応との関係 - 日本健康心理学会第14回大会発表論文集, 352-353.
- Harvey, J.H. (Ed.) 1998 *Perspectives on loss: A sourcebook*. Philadelphia: Brunner/Mazel.
- Harvey, J.H., & Miller, E.D. 1998 Toward a psychology of loss. *Psychological Science*, 9, 429-434.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤 暁 2001 死別経験による遺族の人間の成長 死の臨床, 24, 69-74.
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫 2001 死別経験による成長感尺度の構成と信頼性・妥当性の検証 臨床精神医学, 30, 999-1006.
- Holmes, T.H., & Rahe, R.H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- Horowitz, M.J., Wilner, N., & Alvarez, W. 1979 Impact of Event Scale: A measure of subjective stress. *Psychosomatic Medicine*, 41, 209-218.
- 池内裕美・中里直樹・藤原武弘 2001 大学生の対象喪失 - 喪失感情、対処行動、性格特性の関連性の検討 - 関西学院大学社会学部紀要, 90, 117-131.
- Jacobs, S. 1999 *Traumatic grief: Diagnosis, treatment, and prevention*. Brunner/mazel.
- Jacobs, S., Mazure, C., & Prigerson, H. 2000 Diagnostic criteria for traumatic grief. *Death Studies*, 24,

- Janoff-Bulman, R., & Berger, A.R. 2000 The other side of trauma: Towards a psychology of appreciation. In J.H.Harvey & E.D.Miller (Eds.) *Loss and trauma: General and close relationship perspectives*. Brunner-Routledge.
- Joseph, S., Williams, R., & Yule, W. 1993 Changes in outlook following disaster: The preliminary development of a measure to assess positive and negative responses. *Journal of Traumatic Stress*, 6, 271-279.
- 河合千恵子 1987 老年期における配偶者との死別に関する研究 死の衝撃と死別後の心理的反応 家族心理学研究, 1, 1-16.
- (財)交通遺児育英会(編) 1981 交通遺児家庭の生活危機と生活不安 交通遺児育英会
- (財)交通遺児育英会(編) 1994 交通遺児家庭の生活実態調査 交通遺児育英会
- Lehman, D.R., Wortman, C.B., & Williams, A.F. 1987 Long-term effects of losing a spouse or child in a motor vehicle crash. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 218-231.
- Lundin, T. 1987 The stress of unexpected bereavement. *Stress Medicine*, 3, 109-114.
- 松井豊・福岡欣治・安藤清志 1999 死別反応と精神的健康との関連: 航空機事故による死別反応の研究(1) 感情心理学研究, 7(1) 41-42.
- 松井豊・鈴木裕久・堀洋道・川上善郎 1995 日本における災害遺族の心理に関する研究の展望1 聖心女子大学論叢 第85集, 77-109.
- 松井豊・鈴木裕久・堀洋道・川上善郎 1996 日本における災害遺族の心理に関する研究の展望2 聖心女子大学論叢 第87集, 258-281.
- 松井豊・安藤清志・福岡欣治 2002 近親者との死別による心理的反応(1) 死別状況と直後の悲嘆との関係 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 528-529.
- 松井豊・鈴木裕久・堀洋道・川上善郎・斉藤徳美 1991 災害後の援助に関する研究(1) 日本社会心理学会第32回大会発表論文集, 176-179.
- Miller, E.D., & Omarzu, J. (Eds.) New directions in loss research. In J.H.Harvey (Ed.) 1998 *Perspectives on loss: A sourcebook*. Philadelphia: Brunner/Mazel.
- 大和田攝子 2003 犯罪被害者遺族の心理と支援に関する研究 風間書房
- Park, C.L., Cohen, L.H., & Murch, R.L. 1996 Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, 64, 71-105.
- Parkes, C.M. & Weiss, R.S. 1983 *Recovery from Bereavement*. Basic Books. 池辺明子(訳)1987 死別からの回復 図書出版社
- Rando, T.A. 1993 *Treatment of complicated mourning*. Reserach Press.
- Sanders, C. 1988 Risk factors in bereavement outcome. *Journal of Social Issues*, 44, 97-111.
- Stroebe, W., & Schut, H. 2001 Risk factors in bereavement outcome: A methodological and empirical review. In M.S.Stroebe, R.O.Hansson, W.Stroebe, & H.Schut (Eds.) *Handbook of bereavement research: Consequencesc coping, and care*. American Psychological Association.
- Stroebe, M.S., & Stroebe, W. 1983 Who suffers more? Sex differences in health resks of the widowed. *Psychological Bulletin*, 93, 297-301.
- Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G. 1995 The post-traumatic stress inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, 9, 455-471.
- Weiss, R.S. 1988 Loss and recovery. *Journal of Social Issues*, 44, 37-52.
- Winje, D. 1996 Long-term outcome of trauma in adults: The psychological impact of a fatal bus accident. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64, 1037-1043.
- Winje, D., & Ulvik, A. 1995 Confrontation with reality: Crisis intervention services for traumatized families after a school bus accident in Norway. *Journal of Traumatic Stress*, 8, 429-444.

表1 各年代層における死別経験者の割合

年 齢	死別経験なし	死別経験あり	計
18歳	16 (27.1%)	43 (72.9%)	59
19歳	60 (25.1%)	179 (74.9%)	239
20歳	70 (29.5%)	167 (70.5%)	237
21歳	15 (12.3%)	107 (87.7%)	122
22歳	6 (15.0%)	34 (85.0%)	40
23歳	6 (37.5%)	10 (62.5%)	16
24歳	1 (20.0%)	4 (80.0%)	5
小計	174 (24.2%)	544 (75.8%)	718
40～49歳	18 (8.9%)	218 (91.1%)	236
50～59歳	15 (6.1%)	234 (93.9%)	249
小計	33 (6.9%)	452 (93.1%)	485

表2 大学生群および親世代群における故人との続柄

		子ども	夫・妻	実母・実父	義父・義母	兄弟・姉妹	祖父・祖母	他の親戚	友人	恋人	職場の同僚	その他	合計
若年層	人数	0	0	29	3	3	310	71	78	3	0	41	538
	(%)	0.0	0.0	5.4	0.6	0.6	57.6	13.2	14.5	0.6	0.0	7.6	100.0
中年層	人数	11	4	223	52	18	59	26	26	1	13	16	449
	(%)	2.4	0.9	49.7	11.6	4.0	13.1	5.8	5.8	0.2	2.9	3.6	100.0

表3 大学生群および親世代群における故人との続柄（死別から10年以内）

		子ども	夫・妻	実母・実父	義父・義母	兄弟・姉妹	祖父・祖母	他の親戚	友人	恋人	職場の同僚	その他	合計
若年層	人数	0	0	26	3	1	249	49	73	3	0	335	439
	(%)	0.0	0.0	5.9	0.7	0.2	56.7	11.1	16.6	0.7	0.0	8.0	100.0
中年層	人数	3	3	97	33	8	10	14	11	0	9	11	199
	(%)	1.4	1.4	48.7	16.6	4.0	5.0	7.0	5.5	0.0	4.5	5.5	100.0

表4 死亡原因(病氣と交通事故)とIES得点

死因		IES(合計)	侵入	回避
若年層	病氣(N=310)	22.86(8.45)	12.81(5.34)	10.08(3.62)
	交通事故(N=41)	26.54(10.27)	14.59(6.47)	11.95(4.49)
中年層	病氣(N=159)	25.54(9.66)	14.94(6.08)	10.59(4.04)
	交通事故(N=12)	26.42(8.88)	14.42(5.92)	11.00(3.84)

表5 故人との関係性と死別の衝撃の関係

		IES尺度得点		
		合計	侵入	回避
若年層	肯定的関係性	.187**	.283**	.087
	否定的関係性	.023	.016	.032
中年層	肯定的関係性	.182*	.238**	.080
	否定的関係性	.228**	.223**	.197**

注：回答者数は、若年層437～440名、中年層194～196名。

\* p<.05 \*\* p<.01

表6 性・年代別に見た直後悲嘆得点

		若年層	中年層
男性	平均値	5.886	6.097
	標準偏差	1.795	1.813
	人数	219	186
女性	平均値	6.164	6.408
	標準偏差	1.805	1.746
	人数	324	262

表7 若年層の数量化 類の結果

項目 - カテゴリ		数量	偏相関	度数
性別	1 男	- 0.204	.096	215
	2 女	0.143		308
続柄	1 実父母・義父母	0.702	.158	30
	2 兄弟・祖父母	- 0.170		306
	3 他の親戚	- 0.249		68
	4 友人・恋人	0.522		79
	5 その他	0.167		40
生計	1 担っていた	0.435	.113	91
	2 担っていない	- 0.092		432
原因	1 病気	- 0.031	.026	379
	2 その他	0.081		144
死別時 年齢	1 小学生以下	- 0.241	.086	143
	2 未成年	0.110		329
	3 20歳以上	- 0.035		51
遺体	1 対面した	0.045	.043	401
	2 対面していない	- 0.148		122
突然性	1 突然	0.132	.064	256
	2 看取りあり	- 0.127		267
定数		6.055		
重相関係数			.273	



表8 中年層の数量化 類の結果

項目 - カテゴリ		数量	偏相関	度数
性別	1 男	-0.213	.106	178
	2 女	0.153		248
続柄	1 子・配偶者	0.907	.262	15
	2 実父母	0.176		214
	3 他の家族・親戚	-0.615		143
	4 友人・恋人	0.711		25
	5 その他	0.653		29
死別時 年齢	1 29歳以下	0.188	.095	126
	2 30歳代	0.045		106
	3 40歳代	-0.094		157
	4 50歳以降	-0.371		37
生計	1 担っていた	0.064	.027	147
	2 担っていない	-0.034		279
原因	1 病気	-0.020	.024	349
	2 その他	0.089		77
遺体	1 対面した	0.082	.140	385
	2 対面していない	-0.769		41
突然性	1 突然	0.338	.160	187
	2 看取りあり	-0.264		239
定数		6.265		
重相関係数			.356	

表9 肯定的項目の因子分析の結果

項 目		
自分に自信がもてるようになった	.834	.097
物事にとりくむときの忍耐強さが増した	.785	.317
困難な出来事にも立ち向かっていけると思う	.773	.368
自分が一回り大きくなったような気がした	.720	.248
精神的に強くなった	.714	.258
人生を自ら切り開いていこうと思うようになった	.691	.415
生命の大切さを実感するようになった	.192	.800
人々や物を、いて当たり前、あって当たり前だとは思わなくなった	.146	.740
まわりの人たちへの感謝の気持ちを強くもつようになった	.373	.725
人間関係の大切さを実感するようになった	.256	.714
自分が今生きていることの価値を感じるようになった	.334	.711
他人を思いやる気持ちをもてるようになった	.420	.711
因子負荷量の2乗和	3.971	3.783
因子の寄与率(%)	33.097	31.531

表10 否定的項目の因子分析の結果

項 目			
新しいことに取り組もうという意欲が乏しくなった	.690	.042	.251
以前ほどには努力や善行が意味あるものとは思えなくなった	.676	.029	.236
困難を乗り越えられるという気持ちかもてなくなった	.661	.186	.197
自分に自信がもてなくなった	.664	.181	.348
精神的に弱くなった	.652	.194	.100
「いつかは死んでしまうのだから」と 投げやりな気持ちになることが増えた	.635	.086	.201
他人が死ぬのが怖くなった	.061	.864	-.003
家族や仲間がまた死んでしまうのではないかと思うようになった	.160	.784	.074
自分の死を以前より先恐れるようになった	.084	.726	.132
人間の醜さ・邪悪さを強く感じるようになった	.192	.061	.819
他人を信用できなくなった	.269	-.029	.808
世の中は理不尽だと感じるようになった	.115	.372	.610
因子負荷量の2乗和	2.801	2.149	2.042
因子の寄与率(%)	23.344	17.914	17.020

表11 各因子得点の分散分析の結果(F値)

	性別	年齢	交互作用
[ 肯定的項目 ]			
生への実感と感謝	22.96**	4.44*	.25
自信・成長	.05	9.16**	5.02*
[ 否定的項目 ]			
自己信頼感喪失	6.08*	.04	4.71*
死への恐れ	22.65**	202.48**	.19
他者・世界への不信	1.04	.24	5.34*

\*  $p < .05$       \*\*  $p < .01$

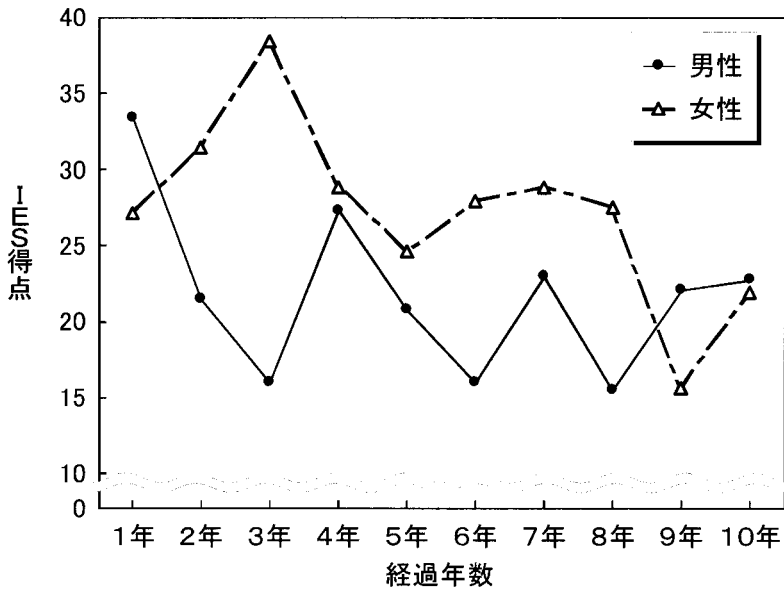


図1 経過年数毎にみた中年層のIES得点

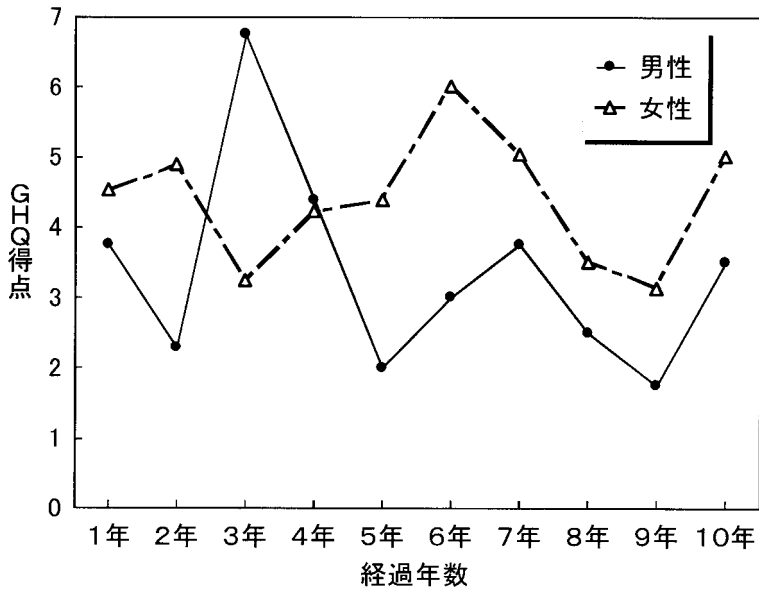


図2 経過年数毎にみた中年層のGHQ得点

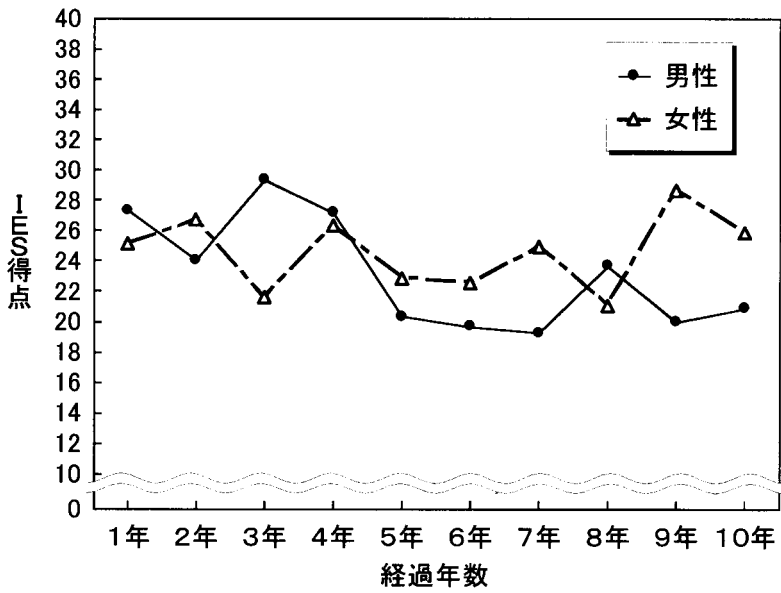


図3 経過年数毎にみた若年層のIES得点

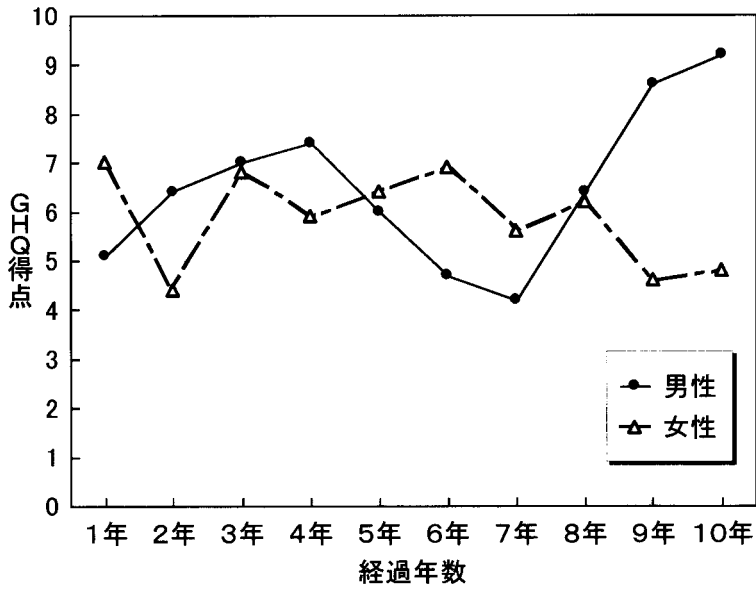


図4 経過年数毎にみた若年層のGHQ得点

【Abstract】

## Psychological Responses to Bereavement: A Preliminary Examination.

Kiyoshi ANDO  
Yutaka MATSUI  
Yoshiharu FUKUOKA

For most people, bereavement is inevitable and one of the most stressful events in life. We aimed at examining the psychological reactions to the bereavement via questionnaire study. University students and their family members were asked if they had ever experienced the death of someone important. Those respondents who answered that they had experienced one (544 respondents between 18 and 24 years of age, and 452 respondents between 40 and 59 years of age) were asked to complete further questions. They involved questions which tapped to measure the psychological and physical impact of the bereavement (e.g., Impact of Event Scale, The General Health Questionnaire) the suddenness of the death, their former relationships to the deceased, the immediate grief reaction, social support immediately after the bereavement and at the present, and the positive and negative psychological changes of their beliefs and attitudes after the bereavement.

The major findings were as follows:

- a) Generally, GHQ scores were not affected by the sex of the bereaved, the length of years after the bereavement, and the bereaved's relationship to the deceased.
- b) For elder respondents (age between 40-59) the mean IES score of female respondents was higher than that of male respondents. The IES scores of those who lost their friends were higher than those who lost their fathers, mothers, fathers-in-law, mothers-in-law, and relatives.
- c) For younger respondents, the IES scores of the those who lost someone in traffic accidents were higher than those who lost someone by disease.
- d) The IES scores were positively correlated to both the positivity and the negativity of the relationship to the deceased.
- e) For both age groups, the immediate grief reaction were reliably related to the kinship and

the sex of the respondents. For younger respondents, the grief reaction was further related to the income level of the deceased. For elder respondents, the grief reaction was also related to the suddenness of the death and the age of the respondents.

- f) The factor analyses conducted on the items of psychological change revealed two factors (designated as 'confidence and growth' and 'gratitude for life', respectively) for positive items and three factors (designated as 'loss of self-confidence', 'fear of death', and 'untrust of the world', respectively) for negative items. The 2 (age) x 2 (sex) ANOVAs were conducted for each factor scores. It was found that the elder group's 'confidence and growth' and 'fear of death' scores were higher than those of the younger group. It was also found that females' 'loss of self-confidence' and 'fear of death' scores were higher than those of males.

